

柳河町遺跡第5地点第2次調査報告

廣松 滉一

【柳河町遺跡第5地点第2次調査概要】

所在地 水戸市柳河町 318 番 1 号（水戸市立柳河小学校校庭）

調査原因 耐震性貯水槽設置工事に伴う試掘調査

調査期間 平成 30 年 6 月 5 日～7 日

調査面積 約 49 m²

調査主体 水戸市教育委員会（担当：廣松 滉一，米川 暢敬，米川 健太）

調査協力 水戸市立柳河小学校

1 遺跡の概要

柳河町遺跡は、完新世に那珂川左岸（北東岸）に形成された、北西—南東方向に長軸を持つ自然堤防上に立地する（第1図）（吉岡他 2001）。その標高は概ね約 8.5m であり、周囲の田園地帯の中に島状の高まりを形成する微高地であることから、現在もそれに沿って集落が形成されている。柳河町遺跡第5地点は、その高まりの縁辺から南東約 700m に那珂川左岸を望む、現在の水戸市立柳河小学校校庭にあたる。

柳河町遺跡はかつて「下河内遺跡」や「柳河遺跡」などと呼称され、昭和 26（1951）年には伊東重敏が本遺跡における採集資料を紹介している（伊東 1951）。また、本遺跡では、本稿で紹介する調査以前にも合計 6 回の発掘調査が実施されている（第1図）。このうち遺構及び遺物が確認されたのは、昭和 27（1952）年 5 月に旧柳河村立柳河中学校考古学同好会により調査が実施された地点（太田一高史学会 1952）（註1）、昭和 37（1962）年 8 月に大森信英によって調査が実施された第5地点（第1次）（大森 出版年不明）（註2）及び平成 27（2015）年 4 月に水戸市教育委員会により調査が実施された第4地点の、計3地点である。いずれも小規模な発掘調査であったことから、遺跡の全貌はいまだ不明瞭であるが、主に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構及び遺物が見られる傾向にある。

本稿に最も関連が深い第5地点第1次調査は、昭和 38（1963）年 9 月刊行の水戸市史（水戸市史編さん委員会編 1963）編さん事業に伴い、「那珂川低地における弥生式文化の始原的問題の追及と、住居形態の解明」を目的として実施された（大森 出版年不明）。当該調査では、竪穴建物跡 2 軒（うち 1 軒は内部に柱穴 3 基を伴う）及び「双円形」ピット 1 基が検出され、弥生土器片（十玉台式並行）、紡錘車、土師器片及び炭化木材等が出土した（第2図；写真1）。このことから、今回の第2次調査においてもそれらに関連する遺構及び遺物の出土が予想された。

2 調査の方法

柳河町遺跡第5地点第2次調査は、各トレンチにおいて重機により表土を除去し、その後はジョレンやコテを用いて人力で精査を行った。なお、今回の試掘調査は小学校校庭における耐震性貯水槽設置箇所の決定を目的としていたことから、試掘トレンチは校庭の中

心を避けて設定し、かつ小学校児童の安全確保の観点から、調査時はカラーコーン及びコーンバーでトレンチ及び重機を囲い、休み時間等に児童が校庭に出る際には重機の運転を停止した。さらに、埋め戻しに際しては、トレンチに掘削発生土を充填したのち校庭の砂を載せ、頻繁に重機による転圧をかけ、可能な限り原状に復した。

3 調査の成果

(1) トレンチ①

トレンチ①は長さ 10m×幅 2 m (20 m²) にて設定し、掘削を行った。その結果、地表下 30cm で遺構確認面である関東ローム層上面に到達した。なお、現地が校庭であり、表層からの転圧による地盤の硬化が著しいため、地表下 50cm まで重機による掘り下げを行ったのち、人力による精査に移行した。

精査の結果、竪穴建物跡 3 軒 (SI01～03)、ピット 5 基 (P01～05)、及び性格不明遺構 2 基 (SX01・02) を検出した。また、SI01 覆土中より土師器片及び須恵器片、並びに各遺構の覆土上面及び関東ローム層上面より弥生土器片、土師器片及び須恵器片を回収した。回収した遺物は合計 47 点である。

【SI01 覆土中出土遺物 (第 5 図 1)】

1 は須恵器片 (坏底部) である。割れ口は円磨され、器体表面は白色化していることから、水流による影響を被っているものと考えられるが、底面の轆轤回転糸切り痕は明瞭である。10 世紀後半の所産であると考えられる。

【関東ローム層上面出土遺物 (第 5 図 2・3)】

2 は弥生土器片 (口縁部) である。弥生時代後期の十王台式土器であり、その特徴である波状の櫛描文及び鋸歯状の口縁が確認できる。本トレンチでは、本資料を含めて計 13 点 (接合後 9 点) の十王台式土器片を回収した。

3 は 5 点が接合した須恵器片 (甕口縁部) である。褐色に焼成されたもので、両面に轆轤回転によるナデ跡が確認できる。本トレンチでは、同一個体と考えられる須恵器片を、本資料を含めて計 13 点 (接合後 5 点) 回収した。

(2) トレンチ②

トレンチ②は長さ 10m×幅 2 m (20 m²) にて設定し、掘削を行った。その結果、地表下 30cm で遺構確認面である関東ローム層上面に到達した。トレンチ①と同様に、表層からの転圧による地盤の硬化が著しいため、地表下 40cm まで重機による掘り下げを行ったのち、人力による精査に移行した。

精査の結果、竪穴建物跡 1 軒 (SI04)、ピット 12 基 (P06～17)、及び性格不明遺構 1 基 (SX03) を検出した。また、SI04 覆土中より弥生土器片、土師器片及び須恵器片、P06 覆土上面より土師器片、P17 覆土上面より楔形石器、並びに各遺構の覆土上面及び関東ローム層上面より弥生土器片及び土師器片を回収した。回収した遺物は合計 45 点である。

【SI04 覆土中出土遺物 (第 5 図 4～6)】

4 は弥生土器片 (頸部) である。6 条櫛歯の原体により施された連弧文及び横走文を有し、弥生時代後期の東中根式土器との関連がうかがえる。また本トレンチでは、関東ローム層上面より十王台式土器片 1 点を回収している。

5は土師器片（皿口縁部）である。9世紀半ばの所産であると考えられる。

6は3点が接合した須恵器片（壺胴部）である。灰色に焼成されたもので、上部には自然釉の付着が確認できる。

【P06 覆土上面出土遺物（第5図7）】

7は3点が接合した土師器片（甕胴部）である。割れ口は円磨され、器体表面は白色化していることから、水流による影響を被っているものと考えられる。古墳時代の所産であると考えられる。本ピットでは、同一個体と考えられる土師器片を、本資料を含めて計10点（接合後7点）回収した。一ピットの覆土上面より同一個体の破片がまとまって出土したことから、本ピットは内部に甕を設置した貯蔵穴として機能していたという可能性を指摘できる。

【P17 覆土上面出土遺物（第5図8）】

8は楔形石器である。石材は暗灰色チャートであり、那珂川河床から採集されたものである可能性が高い。また、左側面に転礫面、右側面中央部及び裏面の大半に節理面を残すことなどから、本資料は、河床礫を節理面に沿って分割した後、両極打撃によって剥片を剥離した残核であると考えられる。

(3) トレンチ③～⑤

トレンチ③～⑤はそれぞれ長さ3m×幅1m（各3㎡）にて設定し、掘削を行った。その結果、それぞれ地表下210cm, 185cm, 205cmで、遺構確認面である青灰色粘土（グライ土）層上面に到達した。遺構確認面より上層は、全て校庭整地のための造成土である。いずれのトレンチにおいても、遺構及び遺物は出土しなかった。なお、トレンチ⑤において、地表下220cmで湧水を確認した。

これらのことから、トレンチ③～⑤周辺は、本来は那珂川左岸の低地帯へと下る斜面であり、遺構と遺物の分布は希薄であると考えられる。

4 まとめ

今般の調査では、柳河小学校校庭北半部の、自然堤防頂部の平坦面と考えられる部分において、堅穴建物跡4軒、ピット17基及び性格不明遺構3基を検出した。また、合計92点の遺物を回収した。

遺物は、主に弥生時代後期、古墳時代、及び奈良・平安時代の土器片が出土した。ただし、SI04のように、一遺構から年代の異なる遺物が複数出土している例が見られる。また、出土した土器片には縁辺が円磨され白化しているものが多い。これらの事実を統合すると、本地点周辺においては弥生時代後期から奈良・平安時代にわたって（連続的あるいは断続的に）土地利用がなされていたが、新しい時代の遺構形成時や、遺跡形成後の洪水により、別時代の遺物同士が各遺構及び表土中に混入したと考えられる。

なお、昭和37（1962）年8月に実施された第1次調査の範囲を確認することはできなかった。校庭の範囲や周辺の建築物の位置は当時とは異なる可能性が高いため、さらに広範囲を調査しなければ、第1次調査範囲の特定は困難であると考えている。

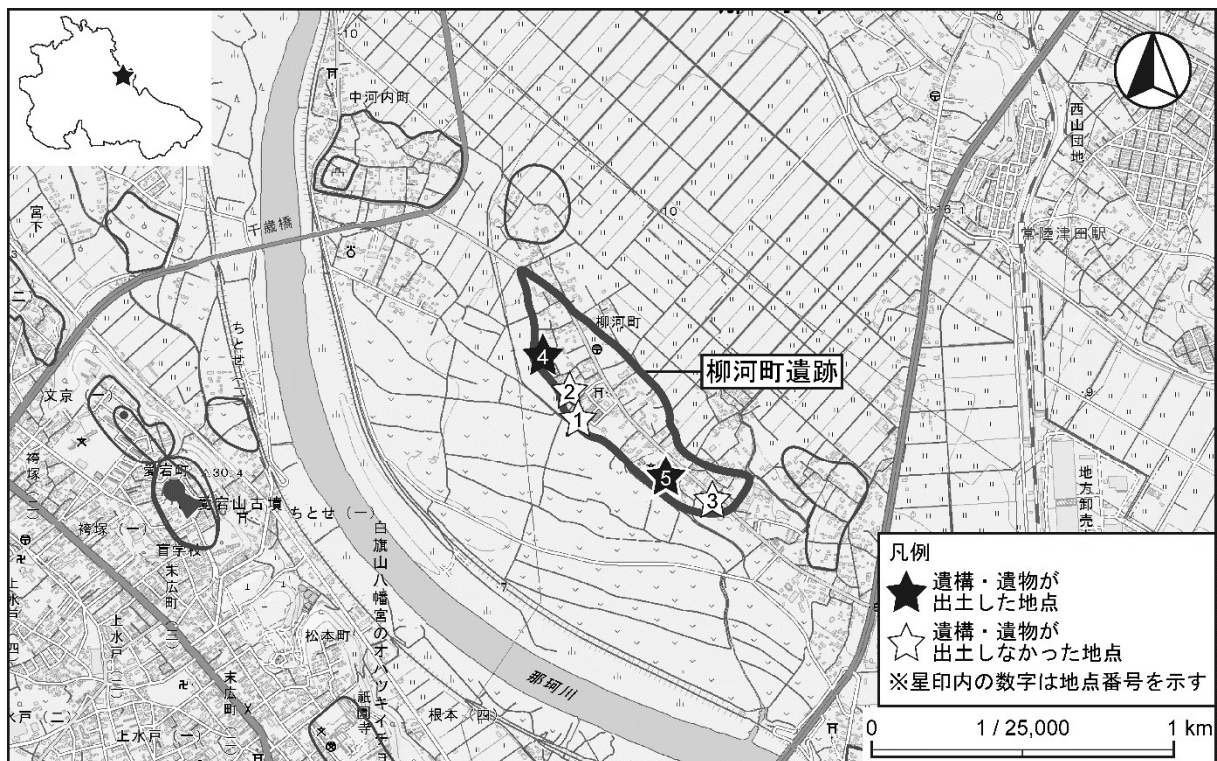
今般の調査に際して、水戸市立柳河小学校の教職員、児童及びその保護者の皆様からは多大なご理解とご協力を賜った。末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

【註】

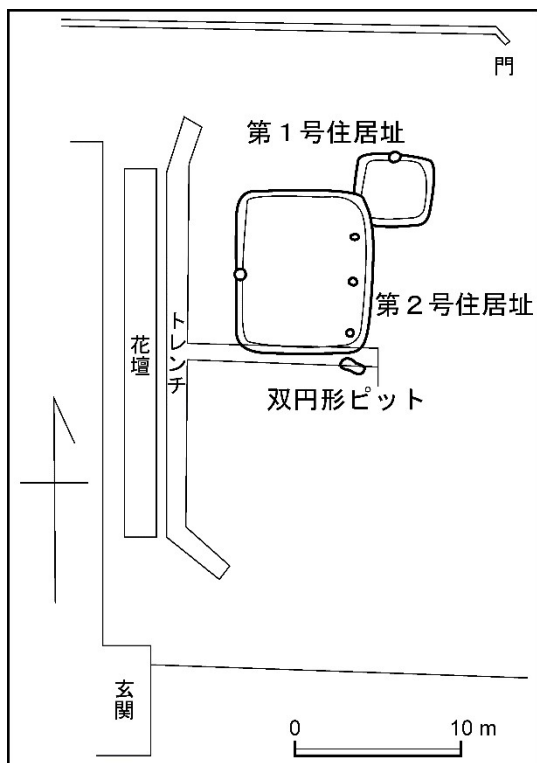
- 1 旧柳河中学校考古学同好会が実施した調査は、筆者が確認した限りでは柳河町遺跡における初めての発掘調査であり、事実上の「第1地点」であったが、具体的な調査地が不明であるため、現時点では地点番号を付していない。
- 2 第5地点については、第2次調査に至るまで地点番号が振られておらず、それまでの間に第1～4地点の調査が水戸市教育委員会により実施されたことに伴い、順次地点番号が振られてしまっていたため、やむを得ず当該地点を第5地点と呼称することとした。

【引用文献】

- ・伊東重敏 1951『常陸國那珂郡下河内遺跡予報』柳河中学校，柳河
- ・太田一高史学会 1952「柳河村十王台式住居遺跡発掘報告」『史考』9，12－13頁
- ・大森信英 出版年不明「柳河町柳河遺蹟調査報告書」『水戸市古蹟調査報告書』水戸市史編さん室編
- ・国土地理院 2016『電子地形図25000 水戸』国土地理院，東京
- ・水戸市史編さん委員会編 1963『水戸市史 上巻』水戸市役所，水戸
- ・吉岡敏和・滝沢文教・高橋雅紀・宮崎一博・坂野靖行・柳沢幸夫・高橋 浩・久保和也・関 陽児・駒澤正夫・広島俊男 2001『20万分の1地質図幅 水戸（第2版）』地質調査所，東京



第1図 柳河町遺跡の位置（国土地理院『電子地形図25000「水戸」』に加筆）。



第2図 柳河町遺跡第5地点第1次調査平面図（大森 出版年不明をトレース・加筆修正）。

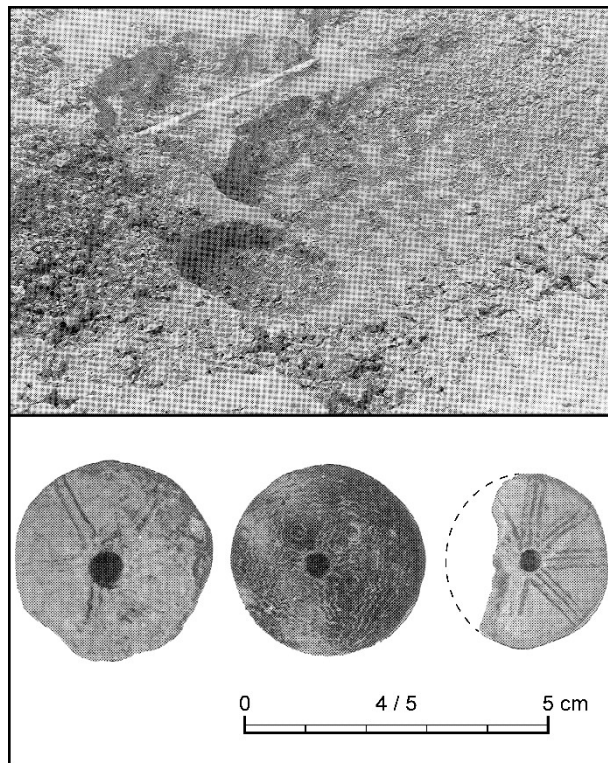
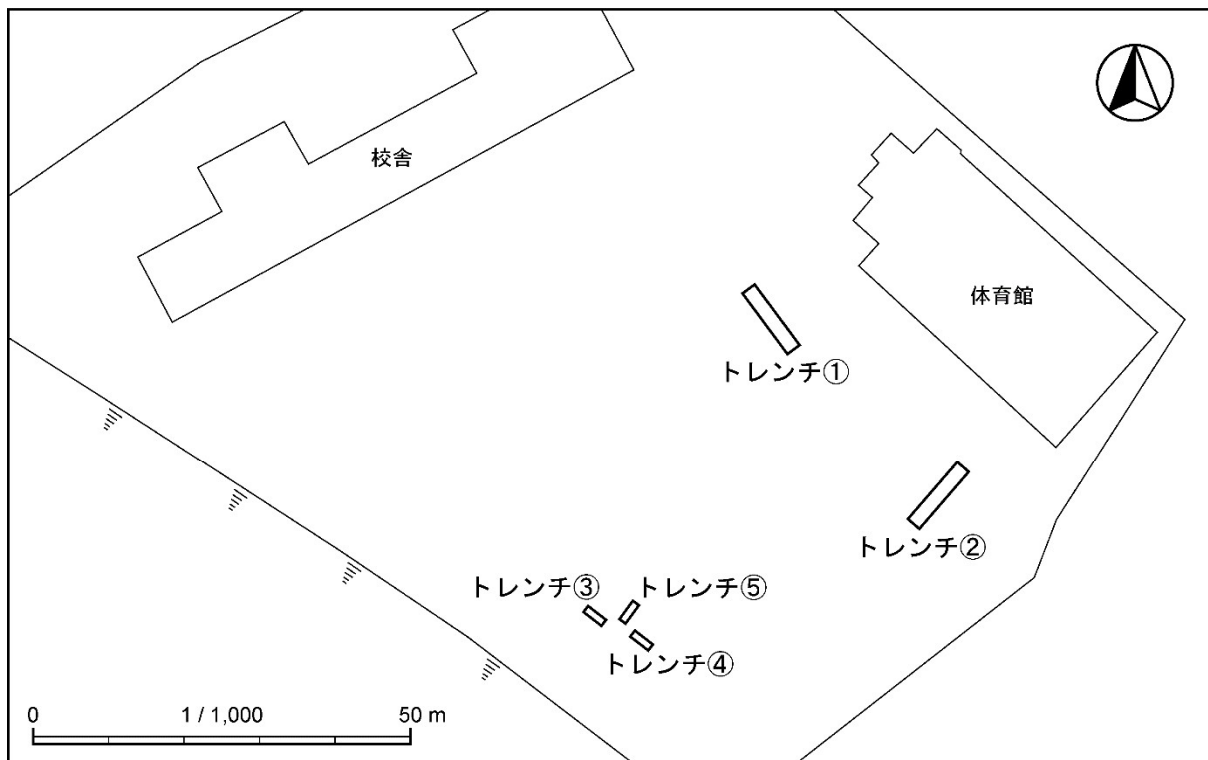
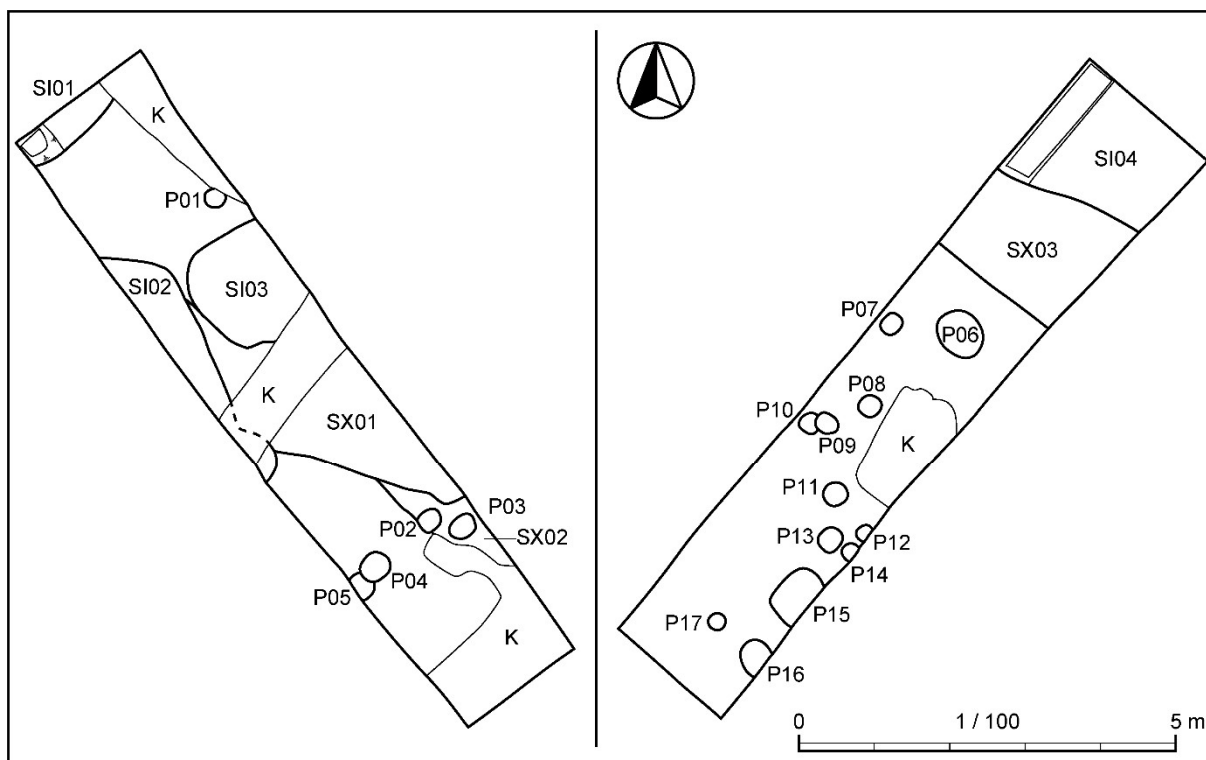


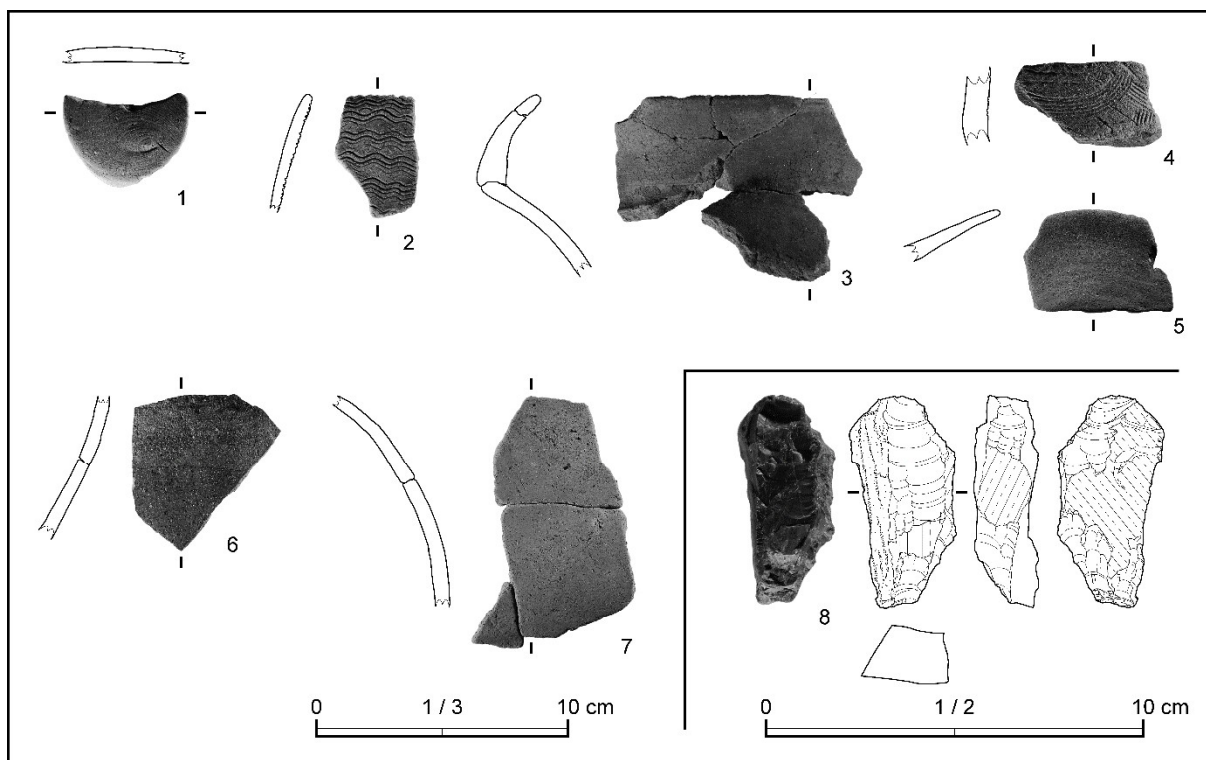
写真1 上段：柳河町遺跡第5地点第1次調査遺構検出状況。下段：同出土紡錘車（いずれも水戸市史編さん委員会編 1963 より引用）。



第3図 柳河町遺跡第5地点第2次調査トレンチ配置図。



第4図 柳河町遺跡第5地点第2次調査遺構平面図。左：トレンチ①，右：トレンチ②（方位及び縮尺は共通）。



第5図 柳河町遺跡第5地点第2次調査出土遺物。1・3・6：須恵器片，2・4：弥生土器片，5・7：土師器片，8：楔形石器。